

訪日タイ人観光客への英語接遇を目的とした ESP 試作教材
の作成

Material Development of Thai English for Learners in
Japan's Hospitality Industry: a Pilot Study

宮本 節子
渡辺 幸倫

訪日タイ人観光客への英語接遇を目的とした ESP 試作教材の作成

Material Development of Thai English for Learners in Japan's Hospitality Industry: a Pilot Study

宮 本 節 子
渡 辺 幸 倫

Abstract

This paper reports the progress of the material development project featuring an English variation spoken by Thai native speakers (ThaiE), specifically designed for learners in Japan's hospitality industry, supported by KAKENHI, Grant-in-Aid for Challenging Exploratory Research, 2016-2018. A pilot class was conducted for a small group of university students to examine the effect of the prototype ThaiE material. This pilot study prompted further inquiry into the reconsideration of the appropriateness and quantity of the material, which takes into account the English proficiency level of students. Also, the test format needs further modification so that the effectiveness of the material in facilitating receptive skills of ThaiE can be objectively evaluated.

はじめに

本稿は、科学研究費（『学習対象としての周縁的英語論の試み：タイ人訪日旅行経験に基づくタイ英語の教材化（挑戦的萌芽研究）研究課題番号：16K13272』2016年度から2018年度）の助成を受けて実施している研究の2年目の成果及び進捗をまとめた研究ノートである。3か年計画で実施している研究は、Kachru（1985）の英語使用の同心円モデル¹⁾によれば独自の規範確立に足る使用域と機能を持たないとされる拡大円英語に属するタイ英語を、「訪日タイ人観光客とのコミュニケーションを向上させるための英語」として学習対象とし、教材化することを目的としている。初年度の調査及び先行研究において、タイ英語は訪日観光客の多数を占める他の拡大円英語変種（中国英語・韓国英語）と比較して「分かりにくい」と認識されていることを確認し（橋本、2017; 宮本・渡辺、2017）、初年度の学習ニーズ調査で得た知見は2016年度の『相模女子大学文化研究』にまとめた²⁾。2年目の課題は、学会

1) Kachru は World Englishes (WE) 論において、20世紀後半の世界における英語使用の状況を、英語母語話者国（イギリス、アメリカなど）を内円 (Inner circle)、英語使用の制度化という歴史的背景を持つ英語第二言語国（インド、フィリピンなど）を外円 (Outer circle)、英語使用の制度化などの歴史的背景を持たない英語外国語国（日本、タイなど）を拡大円 (Expanding circle) とする3つの同心円状に配置したモデルで明示した。

2) 宮本節子・渡辺幸倫 (2017) 「日本における『タイ英語』の認識について：ホテルスタッフへのインタビュー及び大学生の意識調査の分析」、『相模女子大学文化研究』(35), 25-36.

での研究発表を通して専門家との意見交換を行い、情報収集を行った上でタイ英語の教材作成に着手することであった(2017年度における学会発表の詳細は文末資料2.を参照のこと)。教材作成方針として、まずパイロット教材を作成し、専門家による内容チェックと教材利用者によるチェック、教材評価テスト等の形成的評価を実施し(鈴木、2002)、段階的に改善を加えることにする。

教材作成フェーズの第一段階として、タイ英語の聴解を困難にしていると予測される日本英語とタイ英語の語法・音声面の違いを解説し、実際のタイ英語音声を加えた試作教材を作成し、少人数の大学生を対象にパイロットレクチャーを実施した。試作教材の教育効果はレクチャー前後の聴解テスト結果と事後インタビューによって検証し、教材作成の方向性を確認することにした。

タイ英語の試作教材の効果検証調査

(1) 目的

タイ英語の音声面での主な特徴を解説した教材を学習することで、学習前後で聴解力に変化が生ずるかを3回の聴解テストのスコアによって確認する。また、スコアの推移では把握しえない教材の効果をパイロットクラス後の学習者インタビューによって確認し、試作教材の課題と今後の方向性を明らかにする。

(2) 調査方法

実施日は2018年1月26日。対象者は本学4年生6名。6名全員に1か月以上の海外英語研修の経験があり、TOEICスコアは400 - 650程度(表1参照)。3回の聴解テストのスク립トは長さ、難易度及び使用語彙・状況をほぼ均等にするため、観光英語検定試験(TEPT: Tourism English Proficiency Test、以降観光英検)の、異なる回で実施された3級の問題の一部を使用した³⁾。パイロットクラスの構成は以下の通りである。

- 0) 事前アンケート
- 目的: クラス前の学習者の共通語としての英語(English as a Lingua Franca 以降 ELF)、特定の目的のための英語(English for specific purposes、以降 ESP)に対する考え方の把握
- 内容: 非英語母語話者との ELF コミュニケーションの経験
- どうすれば訪日外国人観光客との ELF コミュニケーションを向上させることができるか、海外語学研修経験、等

3) 観光英検3級(初級レベル)の難易度はTOEICでは220 - 470レベル。約3,000語の語彙力と基本的な文法や構文が理解できているかが問われる。具体的には、複数人で海外旅行に行った際に、少人数の友達や同僚と一緒に英語を使って行動することが出来たり、国内で話しかけてきた外国人に対し、道案内や観光地をパンフレット類を利用しつつ英語で説明出来る力が必要とされる(観光英検公式ウェブサイトによる)。

1) 聴解テスト① アメリカ英語。第 25 回観光英検 3 級リスニングテスト
 コミュニケーションが成立するように 4 つの選択肢から正解を選択する「対話文」10 問と、「会話文」10 問、計 20 問。
 問題形式に慣れること、及び後のタイ英語版と比較するために実施。
 各問題の音声は 1 回のみ放送⁴⁾。

2) 聴解テスト② タイ英語。第 23 回観光英検 3 級リスニングテスト
 「対話文」10 問の問題音声はタイ英語話者が音読し、「会話文」10 問
 の問題音声はゲスト部分をタイ人、ホスト部分を日本人が担当⁵⁾。タイ
 英語音声は 3 名の話者によって録音されたものを問題数に応じてほぼ
 3 分割し、分散して配置した。各問題の音声は 1 回のみ放送。

3) レクチャー (30 分程度)

レクチャー教材の主な内容 (教材の詳細は資料 1. を参照のこと)

1. 主な訪日観光客の母語について
 - 一般的な接客のための英語教材の傾向
 - タイ英語に対する認識について
 - タイにおける英語学習事情紹介
2. タイ英語の特徴
 - ・文法
 - ・発音
 - 語尾の子音の消失
 - 英語のタイ文字への置き換えによって生ずる音の変化
 - 二重子音の変化、アクセントを置く位置の特徴等
3. 日本英語と共通した特徴及び日本英語の特徴

4) レクチャー後のリスニング練習 (20 分程度)

タイ人が注意すべき発音 (Gentner, 2014) を含んだ 12 の短文、及び音節数の異なる 40 の単語を 3 名のタイ英語話者が音読したものを聞き、タイ英語の特

4) 実際の観光英検 3 級リスニング試験においては、問題文はすべて 2 回再生される。

5) タイ英語及び日本英語の音声は 2017 年 12 月末から 2018 年 1 月 3 日にかけて、バンコク市内で録音した。タイ英語話者のプロフィールは以下の通りである。日本人部分の SCRIPT は日程上の制限から、渡辺 (男性) と他大学の日本人教員 (男性) が担当した。

タイ英語音声話者

話者	性別	職業	英語学習開始時	訪日経験
M	女性	看護師	7 歳、小学校	ビジネス研修・旅行
B	女性	日系会社で日本語通訳	4 歳、幼稚園	旅行
N	女性	会社員	7 歳、小学校	ビジネス出張・旅行

徴について意見を出し合う。

- 5) 聴解テスト③ タイ英語。第 24 回観光英検 3 級リスニングテスト
「対話文」10 問の問題音声はタイ英語話者が音読し、「会話文」10 問の問題音声はゲスト部分をタイ人、ホスト部分を日本人が担当。タイ英語音声は 3 名の話者によって録音されたものを問題数に応じてほぼ 3 分割し、分散して配置した。各問題の音声は 1 回のみ放送。

6) グループインタビュー (1 時間程度)

主な質問事項

1. (聴解テスト結果について) 3 回のテストの点数の推移を見ての感想、スコアに変化があった場合、スコアが伸びた / 下がった要因の自己分析。
2. (レクチャーについて) タイ英語レクチャーに関する印象、及びレクチャーの前後のタイ英語に対する印象について。
3. (聞き取り練習について) レクチャー後の練習はタイ英語の聞き取りに役立ったか。
4. (ESP の意義について) 訪日観光客との英語コミュニケーションを改善する、という目的のためにはどのような英語学習が必要だと思うか、またどのような目的別の教材を使って英語を勉強してみたいと思うか。
5. (拡大円英語変種を学習することに対する反応) これまでの英語学習で学んできた内円英語の変種 (アメリカ英語、イギリス英語、カナダ英語等) とは異なる「非ネイティブ英語」を学んだ経験が自分の今後の英語学習にどのように影響すると考えるか。

(3) 結果と考察

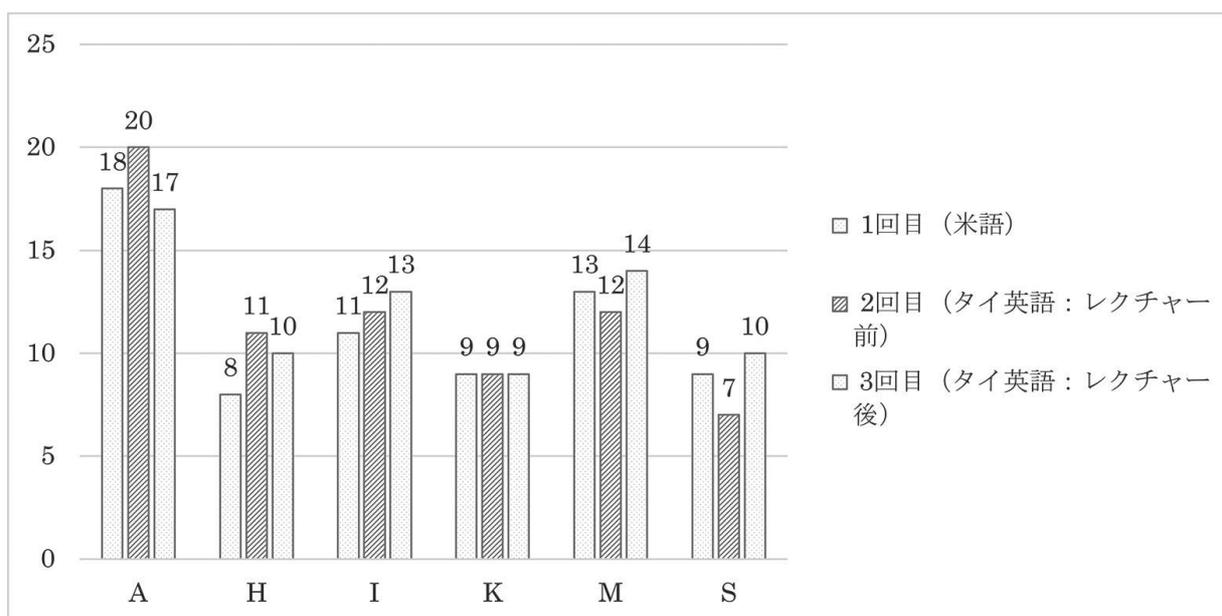
結果の概要を把握するために学習者のプロフィールと 3 回の聴解テストのスコアの推移を以下に示した。

表 1) 学習者のプロフィール

学習者	タイ英語との接触経験	海外での英語学習経験	TOEIC スコア
A	なし	カナダ 12 か月	650
H	なし	フィリピン 4 週間	435
I	なし	オーストラリア 5 週間・韓国 1 週間 ⁶⁾	450
K	なし	フィリピン 4 週間	400
M	なし	カナダ 12 か月	570
S	なし	フィリピン 4 週間・韓国 1 週間	475

6) 本学では毎年 9 月初旬に永進専門大学 (大邱広域市) が運営する「英語村」において 1 週間の英語研修プログラムを実施している。

グラフ1) 学習者ごとの3回の聴解テスト(20問)の正解数の推移



1) テスト結果の推移について

調査実施前には、レクチャーと練習の計1時間の指導ではタイ英語に一定程度慣れることはできても、聴解テストの結果に直ちに影響するほどではなく、スコアの推移は大きくないであろうと予測していた。また、スコアの分析には同形式のテストを重ねて受けることによる解答形式への慣れ、個々の問題の正解に関わる部分にどの程度特徴的なタイ英語が使われているのか等の各設問の特徴、各学習者の元々の英語の聴解力とテストレベルの適合性など、正解に影響する複数の要因を考慮する必要がある。グラフ1)を見る限り、各学習者のスコアの推移には全員に共通した方向を見出すことはできなかったが、これはほぼ事前に予想したような結果であった。レクチャー前よりもレクチャー後のテストスコアが伸びたのは6名中3名にとどまった。これらのスコアの推移の微細な変化を踏まえた上で、それぞれのテストを受けた際に学習者がどのように感じたのか、事後インタビューによって数値には表れない教材に対する評価の把握を試みた。

2) インタビューの分析

レクチャーのタイ英語理解への影響について

学習者にとってタイ英語を意識して聴くことは初めての経験であったが、教材を使用したレクチャーを経て、タイ英語への寛容性が高まったことを確認できた。レクチャーではタイ語がタイ英語にどのように影響するのか、主に発音に焦点を絞って解説したが、話者の母語が英語に影響を及ぼすというある意味周知の事象について改めて系統立てた解説を受けることで、学習者全員が英語の非母語話者として共感を覚え、親近感が増したと回答した。

学習者A: 留学先で韓国、中国、メキシコ人の訛りを聞いたけど、今日の説明でああ、

みんな母語に似てるんだなど改めて理解できて良かった。

学習者 K：少しの知識だけでも役に立つと思う。0 と 1 の違いは大きい。

その結果、レクチャー後の 3 回目の聴解テストはよりタイ英語を聴き取ろうという肯定的な意欲が高まったという。

学習者 I：最初は何を言っているのか分からなかったけど、レクチャーを聞いて、英語圏じゃない人が話しているので分かって、という風に脳が働いた気がする。

聴解テストの解答時には正解を途中で諦め聞き流してしまう場合と、聞き取ろうと集中したが正解に至らなかった場合があり、3 回目のテストでは後者の状況が多かったとの自己分析であった。また、レクチャーと練習で知識として得たタイ英語の特徴がテスト音声に実際に確認できたという学習者 A は、テスト音声におけるタイ英語の特徴分析に注意が向けられ、却って正解が妨げられた可能性を指摘した。今回は 1 回限りのレッスンであったが、タイ英語の聴き取り練習の機会を増やすことで、タイ英語の音声的特徴が目を引き真新しい情報から定着した知識として、聴解力の向上に役立つ可能性が示唆される。

また、レクチャーで紹介したタイ英語の具体的な特徴のうち、学習者が難しいと感じたのは「単語の語尾の子音の無声音化による語尾の消失、語の途中の二重子音の音の変化や消失」など、日本英語と対照的な子音の変化の仕方であった。一方、タイ人英語学習者が習得に苦勞するとされるアクセント位置については (Gentner, 2014)、学習者には抵抗なく理解できると思われる。

学習者 M：日本人はアクセントはここじゃなきゃダメだとは思っていないし、音が消えるよりもアクセント付けてくれた方が分かりやすい。

タイ英語を学ぶことについて

更に、タイ英語のように、規範的な内円英語と異なる英語を学習対象として学ぶことが自分の英語に対する考え方に影響したか、という問いに対しては、元々抱いていた「きれいに話す」ことよりも「通じれば良い」という共通語としての英語の機能面を重視する観点が一層強まったことがうかがわれた。また、特定の外国語訛りが生じるシステムを今回はタイ英語を例に学ぶことによって、今後は聞き取りづらい訛りを聞いても「もっときちんと話してほしい (= 規範的な内円英語に近づけてほしい)」から、

学習者 H：あれっ、と思っても日本人の英語も変だし、(母語の) 癖を持っているのはお互い様なので、癖を直すよりも互いの癖を少しでも聞き取ろうとする方が大切だと思う。

といった、内円英語への近さを価値判断の基準としない、文化相対主義的な視点を得たこともうかがわれた。これは本研究の出発点である「相互理解の達成という目標の前にはどの英語変種も等価であり、その自立性を積極的に認めようとする」EIL (English as an International Language) の立場とある程度共通する認識であり、国際英語論の視点を取り入れた英語教育に必要とされる情意能力 (affective competence)⁷⁾ の涵養において本教材が有益に成り得るという示唆も得ることができた。

カリキュラムへのタイ英語学習の統合について

では、この独自のタイ英語は、多目的な英語習得 (English for general purposes) を主眼とした英語教育課程にどのように取り入れられるべきかについては、一般英語とは明確に区別し、将来アジア圏を中心とした国際ビジネス、ホスピタリティ業に就職を希望する学生が学ぶべき英語として中国・韓国・タイ英語をある程度体系的に学習し、各々の英語変種の聴解試験を受けて達成度を測るべきである、という意見もあった。

学習者 M：「一般の英語は別の所でやって下さい、でももしあなたが将来ホテルとかで働きたいのであればこの授業は取った方がいいですよ」、と紹介する。

学習者 H：ホテルで就職したい人はそこまでやってもいいけど、曖昧な人は、いろいろな英語の癖がありますよ程度のことを知っておけば損はしないと思う。

学習者 A：レクチャーを受ける前はビジネスで英語を使うためにはネイティブレベルの英語が必要だと思っていたけど、こういう特殊な英語を勉強することがビジネスでは役に立つんだなと気づいた。皆に役に立つと思った。

一般英語の運用能力や海外経験の長さの違いによって各学習者の反応にはばらつきが見られ、どの段階でどのように英語変種をカリキュラムに取り入れるか、今後の教材の内容精査に関連付けて、検討を重ねる必要があることが分かった。

おわりに

本稿では、2年計画の研究のうち、2年目の教材作成フェーズの第一段階として、試作教材を作成し、少人数の大学生を対象に実施したパイロットクラスの内容をまとめ、レクチャー前後の聴解テスト結果と事後インタビューによって行った教材評価結果を取りまとめた。その結果、試作教材のタイ英語の聴解力を高める効果は聴解テストの数値の推移では明示され

7) 国際英語論における affective competence とは、異文化を持つ相手との接触で生じる自身の内なる違和感や心理的葛藤を克服し、積極的にコミュニケーション行動を取ろうとする態度・能力を指す (塩澤、1997; 2016)。

なかったものの、グループインタビューによって、試作教材が心理的にタイ英語への寛容性を高め、日本における ELF コミュニケーションの現状に沿った ESP 教材として有益に成り得ることを確認した。

最終年度である来年度には、ここで得られた知見を元に、学習者の英語力を考慮に入れ、教材の内容（場面、発音 / 文法 / 語法等の割合）と分量（単元、練習問題等）を再検討する。同時に、改訂教材の有効性を測る為のより客観的な検証方法を模索し、聴解テストの方法・形式についても検討を重ね、完成版の作成を目指したい。また、今回の教材評価の内容を更に精査した結果を各種関係学会で成果として発表し、内外の専門家と意見交換を行う予定である。

付記 本研究は科学研究費「学習対象としての周縁的英語論の試み：タイ人訪日旅行経験に基づくタイ英語の教材化」（挑戦的萌芽、課題番号 16K13272）の助成を受けたものである。

参考文献

[本文]

観光語学ビジネス観光教育協会観光英検センター（編）（2012）. 『観光英検 3 級の過去問題 + 回答と解説 第 23 回 - 25 回』、三修社 .

塩澤正（1997）. 「“Affective Competence” - その理論と実践」、『中部大学人文学部研究論集』（2）, 1-33.

塩澤正、他（2016）. 『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』、くろしお出版 .

鈴木克明（2002）. 『教材設計マニュアルー独学を支援するために』、北大和書房 .

深川晶子（編）（2000）. 『ESP の理論と実践』、三修社 .

本名信之（編）（2002）. 『事典 アジアの最新英語事情』、大修館書店 .

Hashimoto, et al. (2017) . ‘Perception of Accented Speeches by Japanese EFL Learners and its Relationship with Processing Difficulty’, 教科教育学論集（16）, 45-50, 大阪教育大学教科教育学研究会 .

Kachru, B. (1985) . “Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: The English Language in the outer circle”. In: Quirk R., Widdowson H. (Eds.) , English in the World. Cambridge University Press, Cambridge, UK, 1985.

[試作教材]

大阪大学 言語文化研究科言語社会専攻 『タイ語独習コンテンツ』

<http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/tha/pandl/01.html>

JTB 研究所「国別訪日外国人数（2016 年）」、

<https://www.tourism.jp/tourism-database/stats/inbound/>

吉田英人（2014）. 『ゼロから始めるタイ語』、三修社 .

ランナー・タイ「英語のタイ文字置き換え規準」、

http://www.geocities.jp/lanna_thai_chiangrai/eng2thai/eng2thai.htm

BBC Learning English, <http://www.bbc.co.uk/learningenglish/thai/home>

Gentner, Michael M. (2014) . *Teaching English to Thai Learners*, Bangkok University Press.

George Mason University, The speech accent archive, <http://accent.gmu.edu/index.php>

IDEA (International Dialects of English Archive) ,

<http://www.dialectsarchive.com/thailand>

Pisarn Bee Chamcharatsri, (2013) . “Perception of Thai English”, *Journal of English as an International Language*, Vol. 8, Issue 1.

http://www.academia.edu/3805219/Perception_of_Thai_English

Pronunciation Studio Ltd, “10 English Pronunciation Errors by Thai Speakers”, <https://pronunciationstudio.com/thai-speakers-english-pronunciation-errors/>

Sabajjai Consulting Co. Ltd, 『[コラム] タイ人の英語の発音は変?』

<http://sabaijaicons.com/sound.html>

Wei, Youfu & Zhou, Yalun “Insights into English Pronunciation Problems of Thai Students”, <https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED476746.pdf>

Travelloco, “Thai Language into Asia, Making sense of ‘Tinglish’, the Thai version of English”, https://www.into-asia.com/thai_language/thaienglish.php

資料 1

レクチャーで使用した試作教材

タイ英語について

始めに

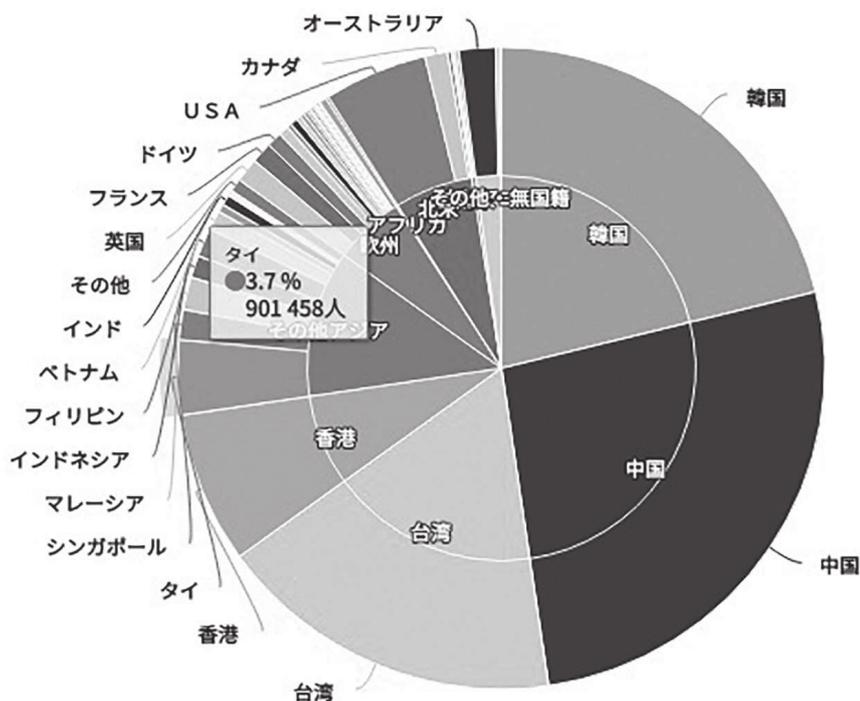
英語でコミュニケーションを取るとき、「人が話す英語は聞き取りやすいけれど自分の英語が伝わりにくい、何度も言い直したり、結局分かってもらえず諦めた」という経験はありませんか。

英語は世界の共通語ですが、話し手は皆それぞれ異なった英語を話しています。いろいろな英語を聞く機会が日本でもあります。彼らが話す英語は、私たちが授業や教材で学んだ英語とは異なっている可能性が極めて高いです。なぜなら訪日外国人の8割以上が英語を母語としない人たちだからです。来日する外国人観光客が急増していることはご存知の通りです。(2017年は計2,800万人以上が訪日。) 皆さんが海外旅行する時に、現地の言葉に自信がない場合にはまず英語でコミュニケーションを取ろうとするように、訪日外国人も日本語が分からない場合には英語で意思疎通を図ります。異なる言語を使う人達の間で意思伝達手段として使われる言語を「リング・フランカ」と呼びますが、日本に短期で滞在する観光客と、サービスを提供する私たちとの間では、英語をリング・フランカとしてコミュニケーションを行っていることが多いのです。ひょっとしたら、彼らも自分の英語が分かってもらえない、という同じ思いを日本人とのコミュニケーションで経験しているかもしれません。

もし皆さんがホテル・レストラン・観光ツアー・ショップなどで訪日外国人に接客する立場なら、このお客様の悩みにどのように応えることができるでしょうか。

特定の目的のために必要とされる英語は"ESP" (English for Specific Purposes) と呼ばれ、観光の分野でも多くのESP教材が作られています。外国からのお客様を想定した「接客のための英会話」のような学習書は数多くあり、大学・語学学校・企業等でも接客に必要な語彙や表現を学ぶコースが提供されています。しかし、これらの機会で使用される学習教材では、外国人のお客様は英語のネイティブスピーカーであることが殆どです。

「ネイティブスピーカーではないお客様の英語を聴き取る」ためには、彼らがどのような英語を話すのかを知る必要があります。訪日外国人を言語別或いは国別にみると以下の通りになります。



国別訪日外国人数 (2016年) JTB 研究所

<https://www.tourism.jp/tourism-database/stats/inbound/>

今日は様々な英語の中から、訪日外国人の第5位のタイ人の英語に注目します。

何故タイ人の英語なのか、というところ

- 1) 「タイ語」が日本人には未知の言語である場合が多く、タイ語がどのように英語に影響するか想像しにくい。
- 2) 年間100万人にのぼる訪日タイ人は日本では母語であるタイ語が殆ど通じないため、コミュニケーションの選択肢が日本語か英語しかない。
- 3) 英文科の学生及び卒業生を対象に実施した調査結果(*)からもタイ英語の特徴に親しむことで、よりよい英語コミュニケーションができる。

(*) 昨年度の1年生と3年生を対象に、同一スピード・同一内容の色々な英語を聞いてもらい、印象を尋ねる調査をしました。結果、アメリカ・イギリス・中国・韓国・タイの順で聞き取り易く、親しみを感じるようです。類似の質問を実際のホテルで勤務している卒業生にしてみたところ、同じようなコメントを得ました。卒業生の中にはほぼ毎日、中・韓国からのゲストと英語でコミュニケーションを取っているので「聞きなれたのだと思う」という人もいました。しかし大学生対象の調査でもタイ人の話す英語が分かりにくい、ということから、ただ「慣れ」だけではなく、「タイ人が話す英語は日本人が話す英語と大きく異なるのではないか」と推測できます。

バラエティー向けにかなり誇張されていますが、日本人とタイ人が英語で会話をしているところを聞いてみてください。

“Thai English VS Japanese English in Mcdonalds simulation”

<https://www.youtube.com/watch?v=uyhoLa6KX-c>

タイ人はどれくらい英語を勉強しているのか？

- ・ 1995 年から小学 1 年から 12 年間の英語教育を実施。
- ・ 富裕層出身者は幼少時から英語の家庭教師を雇用したりインターナショナルスクールで英語で教育を受ける場合も。
- ・ タイは世界有数の観光大国（観光客数では第 10 位、国際観光収入では世界第 3 位）であり、国際ビジネス・観光の間では英語が使用されている。（ホテル・レストラン・土産物屋・マーケット・観光ガイド・タクシー・スパやマッサージ店）
- ・ しかし英語は日本においてと同様、外国語として捉えられ、認識されています（c.f. フィリピン、マレーシア、シンガポール、香港）

タイ英語の特徴

タイ人が話す英語は私たちが英語教材として聞く米語・英語とは異なって聞こえます。しかし文法の面では、日本人の英語と似ているところが多くあります。つまりコミュニケーションがむしろ取りやすい点が多くあります。まず日本英語と似ているところを以下にあげます。

1. 文法

- 1) 冠詞 a, an, the を使わない場合が多い。
タイ語には冠詞がありません。
- 2) 複数形 数詞を伴わない場合に単数か複数かの区別が難しい場合がある。
タイ語では単数か複数で語形が変化しません。
ちなみに数詞はタイ語の場合には名詞の後に続く。
“book two” 2 冊の本か、第 2 巻がどうかは文脈から判断する必要あり。
- 3) 動詞の時制 過去のことを話す場合にも現在形を使うことがある。
タイ語の動詞は時制によって変化しない（過去形がない）
人称によって変化を起こさない（三人称単数現在の s 等）
- 4) 主語が省略される場合がある。

5) 否定疑問文や否定の付加疑問文

日本人：Ah, you don't like pakchee?

タイ人：Yes. I don't like the smell.

日本人：Me, too! It's too strong for me.

タイ人は日本人と同様、否定疑問文や否定の付加疑問文において、肯定と否定の答えを逆にすることがあります。これは日本語と同様に、相手の言ったことの正しさについて、「その通り、私はパクチーは好きじゃないです」という意味で肯定の返事を返す、タイ語の影響から来ています。

2. 発音

恐らく日本人が難しい、と感じるのはタイ人の英語の発音です。母語であるタイ語の発音が英語にも影響しています。

タイ語は音節中に固有の高低アクセントの変化が現れる声調言語です。日本語にはこのような声調はありません。タイ語は中国語がソフトになった感じで、まるで歌っているかのようなリズムが感じられます。一方、英語の音節には声調はなく、強弱のアクセントがあります。このような母語の影響もあってなのか、彼らは、強弱アクセントをつける英語の発音はあまり得意でないようです。

また、日本語訛りの日本人のカタカナ英語と同じで、彼らの英語は、いったんタイ文字に「置き換えて」発音していることがあります。当然、タイ語にない音は、タイ語にある近い音に置き換えるか、省略してしまうわけです。さらには、いったんタイ文字に置き換えるわけですから、タイ語の「声調」が当てはめられ、アクセントも尻上りで、タイ語調になってしまいます。タイ英語のヒアリングに困難をきたす理由としては、この「声調」によることの方が大きいかもしれません。

日本英語と大きく異なる発音を以下にあげます。

1) 子音 タイ語では単語の最後の子音はほとんど発音されない。語尾

(厳密に言うと、タイ人が語末の子音を発音していないということではありません。母語の影響で語末の子音を無声音化するという調音を行っている訳で、日本人はその調音を聞き取れないだけです。日本語には、語尾が子音で終る単語はないので、逆に省略されないで、おまけの母音がついてしまいます。)

英語		タイ英語	発音*	日本英語	日本語
apartment	→	apartomen	アパートメン	apaatomento	アパートメント
donut	→	donu (t)	ドーナツ	doonatsu	ドーナツ
keyboard	→	keybo	キイボー	kiiboodo	キーボード
half	→	hap	ハッ (プ)	haafu	ハーフ
pick	→	pig	ピッ (グ)	pikku	ピック
give	→	gip	ギッ (プ)	gibu	ギブ
light	→	lie	ライ	laito	ライト
lunch	→	lun	ラン	lanchi	ランチ
food	→	foo	フー	foodo	フード

*タイ英語の音をカタカナ表記したのですが、先に述べたようにタイ英語はタイ語の声調の影響が大きいので、カタカナ読みをしてもタイ人の発音を再現することは難しいです。

2) 語尾の "l" が "n" の音に変わる。語尾

タイ語に置き換えたとき、"l" は、"ᳵ" という字が当てられます。語頭では、"l" 音なのですが、語尾の場合は、タイ語のルールをそのまま適用して「黙音」または、"n" 音に変わってしまいます。

英語		タイ英語	発音*	日本英語	日本語
apple	→	appun	アップン	appuru	アップル
football	→	footobon	フットボン	footoboru	フットボール
hotel	→	hoten	ホテン	hoteru	ホテル
central	→	centan	センタン	centoraru	セントラル

3) 語尾の s 音 語尾

タイ語には語尾に "s" 音がありません。タイ文字による「置き換え」の際に "s" 音は "t" 音の文字で書かれます。よって ① "s" 音を全く発音しない、或いは② "t" の音に代わり、ほとんど聞き取れないか、"ッ" 音のように聞こえる場合があります。(日本英語の場合には英語にない母音 "u" を付けることが多い)

①発音しない

英語		タイ英語	発音*	日本英語	日本語
spice	→	spy	スパイ	supaisu	スパイス

price	→	pry	プライ	puraisu	プライス
reduce	→	redo	リドー	ridusu	リデュース
six	→	sick	シック	shicksu	シックス
fax	→	fek	フェック	facksu	ファックス
house	→	hau	ハウ	hausu	ハウス
next	→	nek	ネクツ	nexuto	ネクスト

② “t” の音に代わる

英語		タイ英語	発音*	日本英語	日本語
gas	→	gat	ガーツ	gasu	ガス
rush	→	rut	ラツト	rashu	ラッシュ

4) 二重子音 語の途中

タイ語にない二重子音には、二重子音のどちらかが省略されたり、子音のあいだに“a”などの母音が付加して二重子音を分割して発音します。

(日本語の場合は、“u”音 になることが多いようです)

英語		タイ英語	発音*	日本英語	日本語
film	→	fim	フィーム	firumu	フィルム
icecream	→	iteam/ isakeam	アイティーム/ アイサキーム	isukream	アイスクリーム
ski	→	sakii	リドー	s (u) ki	スキー
sprinkler	→	sapinkar	サピンカー	suprinkuraa	スプリンクラー
switch	→	sawi (t)	サウイツ	suicchi	スイッチ
drive	→	dari (p)	ダリッ	doraibu	ドライブ

5) 単語のアクセント (強調) が置かれる場所

私たちが学習する英語では単語のアクセントが来る場所はそれぞれ異なります。タイ語は最後の音節にアクセントが置かれるため、タイ人が英語を発音する際にも最後の音節にアクセントを置く傾向があります。日本英語も日本語の影響ですべての音節にアクセントを置いたり、最後の音節 (カタカナで書くと最後の文字) を伸ばして話すことがあります。

6) その他

英語をタイ語に置き換えるルールがさだめられていて、発音が変わってしまうものや、もともとの呼び名が異なるなどの単語もあります。

/dʒ/ の音が /t/ に

wage → wait (ウェイツ)

/z/ の音が /s/ に

maze → mace (メース)

/g/ の音が /k/ に

golf → korf (コーフ)

タイ語にない二重母音が一重の短母音や長母音に

mate → met (メツ)

boat → bo 又は bot (ボーツ)

shampoo → sempuu (センプー)

strawberry → sato (サトー)

日本英語と共通する特徴も以下に挙げます。

1) /r/ と /l/ の区別をつけない。

Q: Excuse me, could you tell me how to get to Buckingham Palace?

A: Turn right, go through Green Park, cross the road at the traffic lights, and it's around the corner on the left.

2) /th/ と /s/ の区別をつけない。

Q: Where are you from?

A: I'm from Nara. It's about thirty kilometers south of Kyoto.

We have many historic buildings more than a thousand years old.

日本人の英語の特徴

1) 声が小さい

2) 英語は抑揚が大きくエネルギー消費が大きい一方、日本語はあまり息を使わず抑揚の少ない省エネ言語で声の上げ下げが少ないです。

日) こんにちは。相模女子大学の神奈川花子です。英語を専攻しています。

英) Hi. I'm Sharon MacDonald. I major in Japanese studies at Boston College.

3) リズムの違いと音節の捉え方が異なります (カタカナ英語の影響もある)

例) マップ 2 音節 Map 1 音節、1 拍

トンネル 4 音節 tun-nel 2 音節
マクドナルド 6 音節 Mac-Don-nald's 3 音節

日本語のひらがなカタカナは「音節文字」と呼ばれて文字の数と音節が同一であることが殆ど。よって音節の捉え方が異なる英語をカタカナで忠実に表記することは不可能です。

4) 余分な音（母音）が混じる

of 1 音節 を オブ (2 音節) で発音するので語尾に /u/
and 1 音節 を アンド (2 音節) さらに語尾の /o/ を伸ばす傾向もあります。

5) 英語の母音は日本語の母音よりも多い。

日本語は 5 つの母音しかありませんが、英語は短母音・長母音・二重母音・三重母音で厳密に分類すると 26 もあります。

まとめ

タイ英語の特徴のごく一部ですがご紹介しました。

英語のテキストブックで学ぶ英語とはかなり異なりますが、英語を母語とする人々もそれぞれの地域やお国柄、自分が受けた教育、環境を反映した英語を話しています。英語を母語としない人たちも同様に、それぞれの母語の影響を受けた英語を話します。共通語としての英語でコミュニケーションを取るということは、異なる互いの母語と密接に結びついた個人のアイデンティティーを尊重し合う行為でもあります。日本語訛りの英語、タイ語訛りの英語といっても個人によって大きく異なります。皆さんが話す英語が全く同一ではないのと同様、タイ人が皆これらの特徴を持って英語を話しているわけではないことにご留意ください。とはいえ、年間 100 万人ものタイ人訪日旅行者と英語でより良いコミュニケーションを取ろうと意識し備えることは「接客を目的とする英語」習得の新しい方法であると同時に、日本が誇る「おもてなしの精神」の実践になるのではないかと思います。

英語の多様さにより興味を持って、更なる英語学習に役立てる機会となれば幸いです。

では実際に 3 名のタイ人の話す英語を聞いてみましょう。

(レクチャー終わり)

演習①

以下の文を聞き、タイ英語の特徴について気付いた点を挙げてください。

- 1) What kind of spice is it? It burns my nose!
- 2) I've lived in Shizuoka for a year and a half.
- 3) I'm looking for a drugstore. She's got a headache.
- 4) Do you have this in beige color?
- 5) Nissan stadium is one of the planned football venues for the 2020 Summer Olympics.
- 6) Could you give me a ride to a pickup point?
- 7) Is there any difference between rice ball and "Onigiri"?
- 8) You should avoid rush hour in the morning. The crowds are terrible.
- 9) Thank you very much for inviting us to your house.
- 10) Is it possible to get to the airport by 3 o'clock?
- 11) There will be a one-hour lunch break during the tour.
- 12) At the market, you should ask for some discount on the fixed price.

演習②

以下の単語の発音を聞いてみましょう。

(外来語等)	(難解な音素を含む語)
Harajuku	language
Akihabara	bus
convenience store	thank
Seven-eleven	month
ATM	lunch
metro station	roll
eat-in	zoo
	break
	finish

<p>(Two-syllable words)</p> <p>table</p> <p>Thailand</p> <p>complain</p> <p>chicken</p> <p>happy</p> <p>picture</p> <p>seafood</p> <p>quiet</p> <p>famous</p>	<p>(Three-syllable words)</p> <p>bicycle</p> <p>banana</p> <p>dangerous</p> <p>expensive</p> <p>hamburger</p> <p>photograph</p> <p>appetite</p> <p>fantastic</p>
---	--

<p>(Four-syllable words)</p> <p>memorable</p> <p>preferable</p> <p>cafeteria</p> <p>operator</p> <p>February</p> <p>photography</p> <p>emergency</p>
--

(教材終わり)

資料 2. 2017 年度に行った学会発表の概要

1. 日本「アジア英語」学会での発表の概要

40th National Conference, The Japanese Association of Asian Englishes (2017 年 6 月 24 日、中京大学)

Thai English as a learning target? Needs analysis within the context of English for the tourism industry of Japan

MIYAMOTO, Setsuko
(Sagami Women's University)

While the importance of English as a lingua franca (ELF) has been widely shared among hotel employees and hotel business operators, the role of ELF in workplace communication is yet to be explored. This study aims to analyze the needs and identify the potential benefits of the inclusion of an English variation spoken by Thai native speakers (ThaiE) in the learning materials designed for learners in Japan's hospitality industry. ThaiE speakers, in particular, have been relatively unknown in inbound tourism settings, and the distinctive characteristics of Thai English could cause difficulties in communication with non-ThaiE speakers. Given these situations, this study proposes a shift in the viewpoint toward English varieties: making them learning targets to improve the quality of ELF communication. This is a preliminary study with the intent of applying EIL theories into practice by introducing ThaiE in ESP materials as a learning target. ESP or English for occupational purposes (EOP) for tourism have been developing since the 1990s (Fukayama, 2000, 2007) , and yet many textbooks seem to have been preoccupied with inner-circle standards in acquiring "how to speak properly", and have not met learner's specific aural needs regarding "how to understand better." The results of the two surveys indicate that both hotel staff and university students find ThaiE difficult to understand, which can create a communication problem. However, the viewpoint of learning ThaiE cannot be seen. This gap between learners' needs and their attitudes can be filled with the introduction of EIL perspectives so that learners can be better prepared for an ELF interaction. This is important with ever-increasing number of Thai visitors. Increasing exposure to ThaiE in the form of situation-based listening materials could be one method of facilitating familiarity and positive attitudes toward ThaiE, which will be necessary for achieving specific purposes. It is important to note, however, that ThaiE cannot be referred for English for general purposes (EGP) . Further research will be required to incorporate ThaiE into ESP/EGP curricula in accord with learners' needs and their proficiency in general English.

2. International Association for World Englishes での発表の概要

22nd Annual IAWE Conference: Local and Global Contexts of World Englishes (2017年6月30日ー7月2日、アメリカ・シラキュース大学)

**Needs Analysis of Thai English as a Learning Target:
Business ELF in the Tourism Industry of Japan**

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori
(Sagami Women's University)

This study aims to analyze the needs and identify the potential benefits of the inclusion of an English variation spoken by Thai native speakers (ThaiE) in learning materials designed for the learners in Japan's hospitality industry. Although the importance of English as a lingua franca (ELF) has been widely shared among hotel employees and hotel business operators, their communication with ThaiE speakers has not yet been explored in ELF studies. The number of Thai visitors to Japan in 2014 reached 657,000, which is more than fivefold in the period from 2003 to 2013, and according to the Japan National Tourism Organization (JNTO, 2015) only Asian tourists from China, Korea, Taiwan, and Hong Kong exceeded this number. It is worth noting that the industry and the government have been quick in offering multilingualized services for Chinese and Korean speaking visitors. Therefore, except for Chinese and Korean, Thais constitute the largest group of the speakers of the Expanding Circle varieties among inbound visitors. The questionnaires and interviews for tourism/hotel operators and in-class surveys on language attitudes toward non-native varieties revealed that ThaiE was less familiar, intelligible, and comprehensible than other Expanding Circle English varieties, and yet no educational or training measures have been taken. Although ThaiE has been categorized to be essentially exonormative in the Kachruvian framework, the clear needs for ThaiE as learning targets were confirmed. A curricular change in English for Specific Purposes programs in tourism oriented schools is necessary so that learners can be better prepared for an ELF interaction with the increasing number of Thai visitors to Japan. In order to facilitate achievement of their specific purposes, increasing exposure to ThaiE in the form of situation-based listening material could be one method of increasing familiarity and positive attitudes toward ThaiE.

3. Thammasat ELT Conference でのワークショップの概要

The 2017 Thammasat ELT Conference (2017年6月日－7日、バンコク・タマサート大学)

Toward better ELF communication between Thai visitors and Japanese hospitality service providers: sharing expertise with Thai EFL professionals

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori
(Sagami Women's University)

This workshop aims to share the potential benefits of and discuss the key issues in creating learning materials of an English variation spoken by Thai native speakers (ThaiE) designed for learners in Japan's hospitality industry. Although the importance of English as a lingua franca (ELF) has been widely shared among hotel employees and hotel business operators, their communication with ThaiE speakers has not yet been explored in ELF studies. The workshop consists of four parts. First, the findings of a needs analysis of ThaiE learning will be presented from the perspectives of ELF and English as an international language (EIL). The necessity of a curricular change in English for specific purposes (ESP) programs will be argued to facilitate more effective ELF interactions with the increasing number of Thai visitors to Japan. Second, a discussion will be presented on the current issues related to ESP/ELF education in Japan and Thailand, both of which qualify as Expanding-Circle nations in the Kachruvian framework of World Englishes. Third, the key linguistic features of ThaiE and the means of formatting and enhancing them in the learning materials will be exchanged with the audience. Finally, opportunities of collaboration will be sought with Thai ELT experts/researchers in implementing the project of developing ThaiE learning materials. The workshop is a part of a larger research project (funded by Japan's Ministry of Education) that aims to develop a new English training course for students in Japan's hospitality industry. It offers the audience a unique opportunity to share experience and expertise in combining existing arguments on EIL with practice.